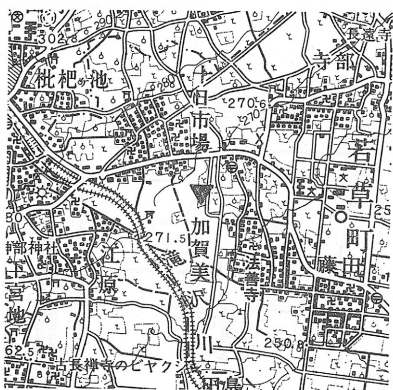


山梨・二本柳遺跡 にほんやなぎ

- 1 所在地 山梨県中巨摩郡若草町十日市場
- 2 調査期間 一九九一年(平3)九月～一九九二年二月
- 3 発掘機関 山梨県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 中山誠二・丸山哲也・小林健二
- 5 遺跡の種類 水田跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀～一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(滝沢)

二本柳遺跡は、甲府盆地西部を流れる御勅使用川と滝沢川がつくる扇状地の扇端部、標高二六〇m前後に位置している。そのため遺跡周辺は古くから湧水に恵まれ、また湧水からの小河川が幾筋も流れ、北部は果樹園地帯、南部は水田地帯となっている。

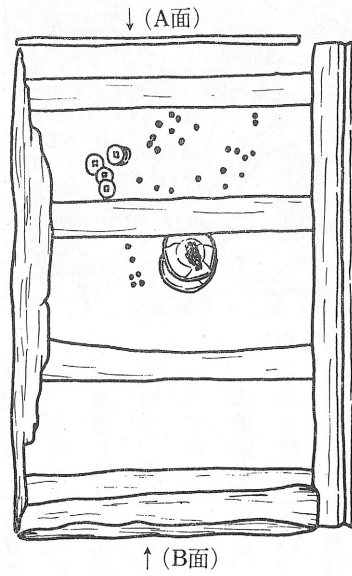
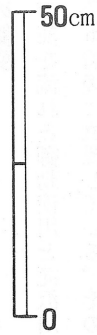
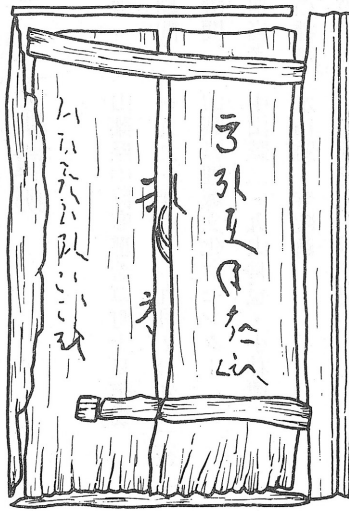
本遺跡の調査は、甲西バイパス建設に伴い、一九九一年九月から山梨県埋蔵文化財センターが行なった。

河川の氾濫による砂礫層・シルト層・粘土層が堆積しており、この間に二層から三層の文化層が形成されている。

調査の結果、古代末から近世にかけての水田跡、戦国時代の溝、井戸、木棺二基が発見された。溝、井戸は、戦国時代の水田が氾濫により埋没した後、堆積した砂礫層の上から掘込まれており、漆碗、常滑焼の甕、かわらけなどが出土した。

8 木簡の積文・内容

- |     |          |          |                  |
|-----|----------|----------|------------------|
| (1) | (八葉)     | □□白蓮一肘間  | (A面)             |
|     | (炳現阿)    | □□字索光色   |                  |
|     | (禪智俱入金剛) | □□□□縛    |                  |
|     | (召入如来寂靜) | □□□□智    |                  |
|     | (迷)      | □□故三界城   | (B面)             |
|     | (悟)      | □□故十方空   |                  |
|     | (本来)     | □□無東西    |                  |
|     | (何)      | □□処有南北   | 061              |
| (2) | 〔梵字〕     | □□□□□□□□ | 380×34×2 051     |
| (3) | 〔梵字〕     | 悟故十方空    | 378×32×2 051     |
| (4) | 〔梵字〕     | 本来無東西    | (380)×(38)×2 059 |



1号木棺出土状況

(5) 「梵字」何処有南北 □

384×36×2 051

(1)は一号木棺で、縦80cm、横55cm、高さ20cmで、底に板を四枚敷いた後、側板をはめ込んだ構造になっており、砂礫層の土圧で蓋板が崩れ落ちていた。蓋板には梵字が、側板にも梵字・偈文が書かれ、稲穂をのせたかわらけ、古銭六枚、数珠が副葬されていた。また、二号木棺にも梵字・偈文が書かれていると思われるが、判読は不可能である。これら梵字・偈文は真言密教で用いられ、元興寺所蔵の『入棺作法』にも記されている。本遺跡の東側では、近在する法善寺の子院で、武田信玄の祈願寺であった福寿院の一部が調査されており、これらの寺院との関係が注目される。また溝は福寿院の寺域境を示すものである可能性が極めて大きく、信玄の影響のもとに、子院の中でも広大な寺域を誇っていたことが窺える。

二号木棺からは(2)~(5)の四点の呪符木簡が出土している。(3)(4)(5)には一号木棺の側板に書かれていたものと同じ偈文が書かれているのが読み取れる。したがって(2)には「迷故三界域」が書かれていたものと思われる。

今回出土した資料は現在分析の途中であり、判読不可能な文字や解明されていない部分が多い。しかし今回のように中世の木棺がほぼ完全な状態で発見された例は全国的にも珍しく、中世の葬送儀礼の一端を垣間見ることができ貴重な資料である。

9 関係文献

藤澤典彦「元興寺所蔵葬送関係次第『入棺作法』」(『元興寺文化財研究』(財)元興寺文化財研究所通信四一 一九九二年)

五味信吾「福寿院について」(山梨県教育委員会『二本柳遺跡』一九九二年)

(小林健二)

